

選評

池上裕子

「ロバート・ラウシェンバーグの《ゴールド・スタンダード》 現代美術のグローバル化に関する一試論」

20 世紀後半の現代美術において、アメリカ美術がなぜこれほどグローバル化したのか。通常それは、世界各地で行なわれたアメリカ作家と現地作家の共同制作というユートピア的コスモポリタニズムや、逆のアメリカ文化帝国主義という、二つのコンテキストで語られる。しかしどちらか一方での解釈は、異文化間の軋轢やハイブリッド化への配慮をとものに欠くとして、筆者は両者の狭間にグローバル化の実態を見ようとする。この論理設定の確かさと、事例を 1964 年の東京で行なわれたラウシェンバーグの公開制作での、彼と篠原有司男、東野芳明らとの緊迫したやりとりで求めた事例設定のうまさ、読者を強く惹きつける本論文のスリリングな展開と説得力を生んでいる。

米ドルが基軸通貨となった金本位制を意味する作品「ゴールド・スタンダード」の公開制作。そこでラウシェンバーグにつきつけられた 20 の公開質問。それを無視して壇上で制作を続けたラウシェンバーグとのコミュニケーションの断絶。あるいはまるまるのコピーによって、オリジナルの権威の失墜に挑んだ篠原のイミテーション・アート。そうしたスリリングな攻防を、帝国主義文化への植民地の対応を分析したホミ・バーバの理論を援用し、借用・模倣・イミテーションの増殖による権威の無力化とハイブリッド化、それによる受容としてグローバル化を読み解いた鋭い読解力は、高く評価される。

本論文は、ラウシェンバーグが 1964 年に世界巡回した 12 ヶ国のうち、あえて日本の東京滞在に焦点をしばって検証した論考だが、この論理設定と方法論は、他地域での類例の検証にも、大きな効力を発揮することが予想される。世界各地でそれぞれにハイブリッド化しつつ、なお広まっていったのが現代美術のグローバル化だとするなら、世界にはまだ数多くの興味深いケースがあるのだろう。すでにそれも著者の視野に入っていると思われるが、今後の研究のさらなる展開と飛躍が期待される。ここに、本論文に「『美術史』論文賞」を授与する所以である。